（現在＝一九五三年＝の貨幣価値に直して約二百億円）の利益をあげ、さきに借りた金を銀行へかえし、戦災で焼けた売春施設を復興し、保守政党へ献金し、官僚にも袖の下をばらまいた。慰安所の閉鎖は業者にとって痛手にはちがいなかったが、これだけ金があれば、ほかの事業にのりだしてもよく、またほかの方法で洋娼企業をつづけることだって不可能ではなかったのである。

業者が預金した七千万円ちかくの利潤を銀行はことごとく歓楽街の建設資金に投資し、各地の高級料理店・キャバレー街・赤線区域などは国民のどん底の生活をよそに急激に復興していった。

第二部　街頭への進出

第一章

1、N病院事件　2、名古屋事件　3、室戸みね子　4、浅見真佐子
5、斎藤悠子　6、大井みどり　7、丹野紀久子　8、桜井睦子

1　N病院事件

四六年の四月四日、つまり慰安所がオフ・リミッツになってまだ一月たたないとき、怖ろしい事件が東京におこった。

午後十一時半ごろのこと、大森のN病院（＝中村病院・その後廃業し、跡はビルと道路

になった）の看護婦さんたち十五人は、寄宿舎の四つの部屋にこもって読書したり、ラジオをきいたり、歌を唱ったりしていた。もうねているひとも半分ぐらいあった。寄宿舎は病院と棟つづきになっていて、裏口からでると二百坪ばかりの庭――といってもコンクリートの屑がいっぱい積みあげられた焼跡だが――を通って淋しい裏通りにでることができ、廊下を通って病院の玄関からでると、これも百坪ばかりの焼跡――こっちはいくらかきれいになっていた――をぬけて表通りへでることができた。表通りと裏通りはちょうど病院と焼跡をだえん形にはさむような恰好に、北東と南西で合して一本の道路になり、その道路は二三度くねくねと曲って遠くへ伸びていた。N病院は産婦人科もやっていたので、たいていの晩はおそくまで手術があったのだが、その日は珍しくそれもなく、寄宿舎の真向いに見える医局には電燈がひとつしかついていなかった（又は全然暗かった?）。つまり医者も事務員もいなかったのだ。（当直のY医師は急の往診患者があってでかけていた。）しかしやはり真向いに見える看護婦の当直室はたいへん明るく、ときどき影が動いて、彼女たちの同僚がそこにいることを示していた。

最初に異変を予感したのはこの当直室にいた二人の看護婦――C子とU子だった。トラックの轟音がだんだん近づいてくると、かなり遠くから真直ぐ焼跡へ乗り入れたらしく、コンクリートの廃物をよけてあちこち向きを変えている様子だった。C子はカーテンをあけて見たが、窓が光ってよく見えなかったので、さらに窓をあけてそっちを眺めた。外科の患者をトラックに乗せて運んでくるのは、たまにあることだった。しかしそのときトラックは病院から二十メートル（四十メートル?）ばかり離れたところで、こっちへ向いたままとまっていた。なぜとまっているのがわかったかというと、強烈なヘッドライトがC子を照し、しかもそれが動かず、エンジンの音もきこえなかったからである。

「変なトラックねえ」といってC子はともかく窓をしめた。と、今度は反対の方角からも同じような轟音がきこえてきて、やっぱり同じような距離のところでとまった（らしかった）。そしてその次には、違うトラックの轟音が裏道の方からやってきて焼跡の向うでとまったのを、寄宿舎にいた看護婦たちがききつけた。

それから二三分して、フィー！　という口笛が五ヵ所ぐらいでおこった。それはもう、病院の建物のすぐ近くで鳴ったものだった。とくにC子とU子がきいたのは当直室の窓のすぐ下で鳴りひびいた。

気丈なU子が窓をあけて、「誰?」と呼んだ。するとすぐそばで「ダレ?」と妙なアクセントの男の声がこたえ、四五人の高笑いが闇のなかからきこえた。と思う間もなく、（まるで怪物のように）たくさんの男がU子の前（といっても外だが）に現れた。みんなアメリカ兵だった。ひとりが「コンバンワ」といい、U子がとまどっているうちに窓から部屋の

なかへとびこんできた。つづいてもうひとりとびこんできて、U子を抱えあげようとした。U子は足をばたばたしながら、「C子さん！　はやく！　はやく！」といった。C子はただ恐怖に駆られてぼんやり突ったっていたが、この言葉をきいて廊下へとびだそうとドアをあけた。廊下を走って寄宿舎の方へ曲ろうとすると、そこにもたくさんアメリカ兵がいた。（そのときU子のおそろしい悲鳴をきいたように思った。）ひき返して医局のドアをあけたが、医師はまだかえっていなかった。医局のなかへはいって卓上電話を手にとろうとしたとき、追いかけてきたアメリカ兵が彼女をうしろから抱きすくめた。このときの彼女の悲鳴は寄宿舎まできこえた。

手前の大病室（十六人？　はいっていた。みんな女ばかりだった）からK子（患者）ほか二三人がねまきに丹前を羽織っただけの姿でとびだしたとき、アメリカ兵の一団が「ホ！ホ！」と叫びながら突進してくるのがみえた。彼等は大病室に乱入し、妊婦・産婦・病気の婦人たちのふとんを剥ぎとり、その上にのりかかった。村塚セツさん（二十九・神奈川）の、二日前に生れたばかりの赤ちゃんフミ子ちゃんは、一人の兵隊に床に蹴落されて死んだ。安らかな病室は一瞬にして眼を掩うばかりの地獄と化してしまった。（この病室にはいったアメリカ兵はみんなで九人ばかりだった。）一人の婦人が隅の電話器へとびつこうとしたが、その前にアメリカ兵が拳銃を射ってそれをこわした。隣りの病室にも女性はたくさんいたが、みんな重症患者だったので、ここにはアメリカ兵たちも手をださなかった。軽症の男の患者たちが病室からでて抵抗しようとしたが、拳銃をつきつけられたのでだめだった。

一方、看護婦さんの寄宿舎の裏口からも十五六人（二十人以上いたという人もある）のアメリカ兵が侵入してきた。廊下の方からも十人ほどやってきたので、彼女たちはどっちへも逃げられなくなった。彼女たちは大声で「助けて！　助けて！」と叫びながらそこらにあるものを片っぱしから投げつけて彼等を近寄らせまいとしたが、ここでも拳銃が威力を発揮した。彼女たちはひとりまたひとりと抱きかかえられ、裸にされ、仰向けにころがされた。十分もたたないうちに彼女たちはひとりのこらずアメリカ兵の下になってしまった。ミスM病院のM子などは続けさまに七人の兵隊に犯され、気絶した。（M子のおぼえているだけで七人である。あるいは六人だったかもしれない、という。）

彼等はおよそ一時間ちかくも病院じゅうを荒しまわった。彼等の総数は二百人とか三百人とかいう説もあるが、おそらく三台のトラックに乗れただけの数――五十人前後――というのが正確にちかいであろう。六十人ほどの婦人患者のうち臨月の婦人や重症者をのぞく四十数人が凌辱され、看護婦は十七人が全部凌辱され、ほかに十五人ないし二十人の付添婦・雑役婦などが凌辱された。また男の患者が二人、拳銃弾で軽傷を負った。

看護婦や婦人患者たちが裸でころがっているあいだを通って、侵入してきたときと同様、彼等は表玄関と裏口から引揚げていった。すぐにトラックの轟音がおこり、それはやがて東京港の方角に消えていった。（類似例二）

2　名古屋事件

同じく四月十一日の夜半、名古屋市中区の住宅街の一割を、ジープと中型トラックに乗ったアメリカ兵たち（実数はわからないが約三十人及至六十人と見られている）が遠巻きにとりかこんだ。彼等は四方の電話線を切断してから各家庭を襲ったが、経過は次のとおりである。

まず最初に、その一画のかどにある江田警さんの家が襲われた。しきりに戸をたたく音がするので警さんが起きてあけたとたん、自動小銃がつきつけられ、四人（あるいは五人）のアメリカ兵が室内にはいってきた。奥の六畳の間に妻の咲子さん（三十二）と三人の子供がねており、その裏側の三畳間に咲子さんの妹の道子さん（二十四）がねていた。彼等は「ヘーイ！」「ネヴァマイン！」などといいながら咲子さんのふとんを剥ぎ、強姦した。自動小銃を持った兵隊がそばに立っていたので、何の抵抗もできなかった。警さんはすでに頭を銃の台尻でなぐられて玄関さきで昏倒していた。

同時に、咲子さんのそばにねていた長女のナミさん（十）が強姦された。彼女の泣き叫ぶ声は近所にもきこえたが、誰も助けにこなかった。その辺いったいが全部襲撃されつつあったからである。

道子さんが眼をさましたときには、もう枕もとに兵隊たちが立っていた（三人いた）。彼女は自動小銃をつきつけられなかったので、できるだけ抵抗したが、しょせん逃げることは不可能だった。彼等は笑いながら彼女を犯した。

隣家の加賀谷大二郎さん方へは、同じく自動小銃（機関銃？）を持った四人の兵隊が雨戸を押し破って侵入してきた。八畳ふた間のこちら側にねていた母親のトクさん（五十五）が真先に犯され、次いでそっち側の八畳にねていた妻愛子さん（二十九）が犯された。大二郎さんは柔道が強かったので一人のアメリカ兵を投げとばしたが、背後からうたれ、愛子さんのそばに倒れた。

江田さんの左隣りの武藤健二さんの家も雨戸から侵入された。武藤さんの奥さんは何年か前に病死していたので、そのとき家にいたのは武藤さんと弟二人、それに一人娘の京子ちゃん（六ツ）、叔母のヨウさん（四十八？）、その娘のみどりさん（十五）、その弟（名前年齢不明）の合計七人だった。アメリカ兵が二人はいってきたとき、武藤さんと弟二人

が抵抗して大乱闘になり、そのすきにヨウさんとみどりさんは京子ちゃんをつれて外へ逃れた。みどりさんは警察に電話をかけようとしたが、むろん通じなかった。

しかし、外にでるや否や、待ちかまえていた数人のアメリカ兵が襲いかかってきた。ヨウさんとヨウさんに抱かれていた京子ちゃんはそのまま道路の上に押し倒され、強姦された。みどりさんは抱きかかえられて中型トラックの上につれてゆかれ、そこで輪姦された。姉を救おうとしてアメリカ兵にしがみついたみどりさんの弟は軍靴で蹴られて気絶してしまった。

加賀屋さんの隣りにはA機械製造会社の家族寮があって、三田さん、渡辺さん、檜垣さんなど八世帯が住んでいた。アメリカ兵は各部屋を襲い、男たちと激闘をはじめた。二人だけ拳銃を持っていたらしく、二つの部屋で銃声がきこえた。しかし玄関の脇の都屋に住んでいた檜垣さんがとっさの気転で大スイッチを切ったので、寮じゅうは真暗になり、兵隊たちの残虐は相当阻止された。ここは居心地がよくないと思った兵隊たちは、目的を果さずに退散したらしい。それでも渡辺さんの奥さんが完全に凌辱され、他の四人の女性が不完全ながら強姦され、また他の三人の女性が傷を負った。

武藤さんの裏の家に住んでいた岡純之介さん方には、玄関と雨戸の両方から十人ちかくのアメリカ兵が侵入してきた。純之介さんと同居人の新田章さんは、格闘の最中、鉄棒様

のもので頭をなぐられて気絶した。岡さんの妻、新田さんの妻、岡さんの娘二人（いずれも名前不詳）が凌辱され、岡さんの息子二人がなぐられて負傷した。女中さんの瀬崎まさ子さん（十八）は裏口から逃げようとしたところをアメリカ兵につかまり、庭の真中で輪姦された。（彼女はその後同家から暇をとってゆき、しばらく南区の某工場に勤めていたが、朝鮮戦争の開始後、洋娼に転落し、一九五三年現在、混血児を抱えてなお洋娼をつづけている。）

A会社家族寮の裏の湯沢洋子さん（湯川洋子？　伊沢洋子？　年齢など不詳）のところへは数人のアメリカ兵が窓から侵入、洋子さんと妹さん（名前不詳）を凌辱した（不確実）。その二階に間借りしていた毛利さん（森さん？）の奥さんも同時に凌辱された（不確実）。

深夜の街は時ならぬ銃声と悲鳴と獣たちの笑いごえにわきかえり、大混乱に陥った。この一割は大きな道路をへだてて他の街の一割とむかいあっていたので、そちら側のひとたちが電話で警察とMPとに知らせ、石や棍棒を持って救援にかけつけた。機関銃の乱射の前にそのひとたちが立ちすくむすきに、兵隊たちは悠々とジープや中型トラックに乗りこみ、かえっていった。何人かのひとがそのあとを自転車で追いかけたが、スピードが違うのでついに見失ってしまった。しかしそれらのジープのなかの一台は、（街燈や他のジープのヘッドライトの光で見たところによると）たしかに三五五四九のナンバープレートを

つけていたという。

しばらくたって、日本の警官に案内されてMPが二台のジープでかけつけてきた。興奮していた家族寮の社員たちが、口々にわめきながらジープをとりかこむと、MPはそのひとびとに拳銃をつきつけ、そのうちの二人に手錠をはめ、連れ去ってしまった。さらに日本の警官たちがトラックに乗ってやってきて、「暴行容疑」「占領目的違反容疑」で六人の男を逮捕し、また「風紀を乱した」という疑いで三人の強姦された婦人を逮捕していったのだった！

それからもMPや警察はしょっちゅうやってきてひとびとを監視した。ひとびとはたえきれずに一人また一人どこかへ移転してゆき、半年たたないうちに二軒だけをのこしてみんないなくなってしまった。（類似例一）

3　室戸みね子

室戸みね子（二十五・東京）は、一九四五年十一月十六日の夜八時か九時ごろ、立川のちかくで三人のアメリカ兵に強姦され、そのまま暴力団に誘拐されて慰安所で働いていたが、オフ・リミッツと同時に五円もらっただけで慰安所から追いだされた。日本人の客をとるならいてもいいと主人からいわれたけれども、彼女はどうしてもその気になれなかった。許婚だった男は半月ほど前にほかの娘と結婚して地方へ転住してしまっていた。彼女は戦災で肉身を失っていたので、どこへもゆくあてはなかった。前に借りていたアパートへいってみたが、そこにも知らないひとが住んでいた。

彼女は自分をこんなにしてしまった三人のアメリカ兵を憎んだ。しかし、慰安所へかよってきたアメリカ兵のなかでとくに親切だったキャブやハウマンやヘビンのことも忘れられなかった。除隊になったらすぐ結婚しようと約束してくれたキャブに逢いたくなって、彼女は小さな辞書と封筒を買い、郵便局でたどたどしい手紙を書き、立川キャンプのキャブあてに出したりした。

黙っていてはたべてゆかれないので、彼女はもとの勤め先へいったり、いろんな店をまわったりして就職をたのんでみたが、濃すぎる化粧をし髪を金色に染めた彼女をおいそれとやとってくれるところはどこにもなかった。それに、彼女の病気はもうかなり重く、歩くのもだるかった。

彼女は立川を離れたくなかった。キャブが小さなカフェーに逢いにきてくれたので、彼女は金をねだり、農家をさがして気にいった部屋を借りた。やがてキャブの紹介でいろんなアメリカ兵がやってくるようになり、彼女は慰安所時代よりいくらか幸福になったと思

った。しかし兵隊のひとりからキャブに妻があることをきかされたとき、彼女はカルモチン（睡眠薬）をのみ、失敗して生きかえった。病気がますますひどくなってきたので、兵隊たちもだんだんこなくなった。たまにくる客には彼女は口と指を使ってサーヴィスするよりほかなかった。そんな物好きさえやってこなくなったとき、彼女は部屋代をはらわずに農家から逃げだし、地下道や焼ビルにとまってあるいた。

いまは日本人が――それも浮浪者たちが彼女の客であった。MPにつかまって北区のVD病院（米軍の性病施設）に入れられたとき、彼女はもう骨と皮ばかりになっていた。鉄棚にかこまれた病棟のなかで治療もされずに放っておかれたあげく、四六年の十月、彼女はそのVD病院で死んだ。（類似例九）

4　浅見真佐子

B女専（現在は女子大）二年生の浅見真佐子（二十・東京）は、英語がよくできるので評判だった。四六年四月のある日、ひとりでニコライ堂のちかくをあるいていると、高級車に乗った米国の士官に道をきかれた。彼女は会話には自信があったけれども、ほんものの米国人と話すのはこれがはじめてだったので、ぼッとなりながら余計なことまでしゃべ

った。士官は美しい真佐子に興味をおぼえた様子で、道を教えてくれたお礼をしたいから一緒に車へ乗れ、とさそった。彼女が微笑しながらもじもじしていると彼はその腕をとって強引に車に乗せ、蒼い眼でじっとみつめて、「ユウ・ベェリ・ウツクシイデス、ラブユウ」とささやいた。彼女は胸が高鳴り、あやうく彼の方へ倒れかかりそうになった。

彼――ヘンリイという名だった――は真佐子をPX（米軍の売店）へつれてゆき、ブローチと造花を買ってくれた。東京をよく知らないから案内してくれという彼のために、彼女は毎日時間を裂いてつきあうことを約束した。二人が並んで歩くと道ゆくひとはたいてい羨しそうにふりかえってみるので、彼女は幸福を感じた。夏のある日鎌倉の方までドライブした帰り、ヘンリイは彼女を横浜のホテルにひっぱりこんで情交をせまった。彼女は抵抗したが、結婚するからというので、遂に身をまかせた。

相当なドン・ファンのヘンリイは、前にいたドイツ・イタリア・フィリピンなどでの経験とくらべてみて、日本ほど女がかんたんに体をゆるす国はめずらしいと思った。彼は世田谷の美しい接収住宅に、キャンプのタイピストを四人目のスペシャル・メイドとして囲っていたが、早速その女を追いだし、真佐子をよんで一緒に暮しはじめた。ヘンリイが正式に結婚してくれないのはGHQの許可がまだでないためだと彼女は信じていたから、近所の日本人がスペシャル・メイドという言葉を口にするのをきくと泣いて怒った。彼女の

うちでははじめ心配したけれども、ヘンリイがいちど彼女の両親に砂糖や服地などをプレゼントして以来、かえって娘のことを自慢するようになった。

彼女はときどき派手な服装をしてヘンリイの車で学校へやってきた。「あたし、ヘンリイと一緒に国(ステイツ)へかえるのよ。こんなこせこせした日本になんかいたくない。あんたたちもほんとの幸福が欲しかったらアメリカ人と結婚するのね。」彼女のこんな言葉は、級友たちに大きな動揺をまきおこした。六人の級友が彼女とヘンリイの紹介でアメリカ兵と知りあい、ごく短い日時のあいだにそれぞれ肉体関係を結ぶようになった。「日本の男なんか貧乏で貧相でやりきれないわ。あたしたちはそんな下らない日本の男に長いあいだおさえつけられてきたのよ。だからあたしたちが日本の男をみかえしてやる方法は、日本の男たちを征服した男たちと結婚する以外にはないわ。」彼女の論理に逆らう友人はいなかった。四六年の十一月にはB女専の学生約五百人のうちアメリカ兵の情婦になっている者が五十人をこえるほどになった。彼女たちは「自由グループ」という団体を作り、教師たちとその家族の食糧調達を引受け、ピアノを学校に寄附し、感謝状をもらった。校庭や寄宿舎にはいつもアメリカ兵の姿が見られた。一二の雑誌は「新しい女性」という題で彼女たちのことを紹介し、四七年にはB女専の受験生が例年の三倍にふえた。

ヘンリイに捨てられたとき、真佐子は三度目の堕胎をしたあとであった。美しい接収住宅には六人目のスペシャル・メイドがやってきて、ヘンリイにあわせてくださいとたのむ真佐子を剣もほろろにつっぱねた。彼女はしばらくして諦め、ヘンリイでなくてもいいからあんな接収住宅に住まわせてくれる士官をさがしだそうと決心したけれども、いちど捨てられてみると、下士官や兵隊でさえ彼女と一緒に暮らそうとはいってくれなかった。彼女は接収住宅や渡米を夢見ながら、毎晩違う兵隊と関係した。彼女ばかりでなく、「自由グループ」のメンバーの大半は前後して彼女と同じような運命をたどっていた。

(類似例三十四)

5　斎藤悠子

斎藤悠子（十九・豊中市）は四六年の春、大阪のミッション系の女学校を卒業するとすぐ（多分四月十日ごろ）、刀根山キャンプの将校クラブのメイドになった。将校クラブのメイドに限ってキャンプ内へ寝とまりすることが許される――友達はみんなそのことを羨しがった――ので、うちへは一週にいちどかえるだけであった。「どこへお勤め？」とひとにきかれると、彼女は真紅な洋服の胸をそらして、「進駐軍！」と答えた。そう答えるとき、彼女はすべての日本人に対して優越を感じた。

そのクラブには下級の将校が二十数人と、彼女も含めてメイドが二十数人いた。一人の将校に一人のメイドがつきそって、身のまわりいっさいの世話をし、時にはタイプを叩いたりするわけである。彼女はサレットという若い中尉のお付きになった。はじめて勤めた晩からサレットは当然のことのように彼女の肉体を求め、彼女も当然のことのようにそれに応じた。

キャンプのいちばん奥に将校たちの個室が並び、それぞれの個室のそばにメイド用の小さな部屋が附属している。窓から眺めるとすぐ手前に下士官クラブがあり、そこにもメイド用のウィングがついている。さらに左の方には食堂があって食堂用メイドの溜りがそのそばに建っている。その向うには家族持ちの士官・下士官のための住宅が隙間なく建っているが、実際に家族のはいっている家は三分の一もなく、あとは全部士官・下士官とメイドの二人暮らしの家ばかりである。「ここにはえらばれた女ばかりがいる。えらばれたといってもそれにはやはり階級があって、兵隊と結婚してるのはいちばん下、下士官と結婚してるのは中、将校と結婚しているのは上だ。わたしはその上のなかでも身分の高い方だ。」悠子はそう思うと嬉しくてたまらなかった。

一月ほどして、サレットは突然国へかえることになった。すぐに結婚式をあげてくれるか、それともいずれ迎えにくると約束してくれるかどっちかだろうと彼女はあてにしていたのに、彼は「いろいろ世話になった、君は実に従順だったな」といっただけで飛行機にのってしまった。そして彼女は即日首をきられた。

彼女は毎日泣いて暮らした。泣きぬれてキャンプのちかくをうろつき、顔見知りの下士官にうったえたり、サレットに恨みの手紙を書いたりした。もちろん返事はこなかった。

四七年の六月に、彼女はサレットによく似た子供を生んだ。子供のために働こうと決心して、兵隊たちから買ったコーヒーや砂糖を街の喫茶店に売りつけたりしているうち、彼女はいつかその兵隊たちとも肉体関係を結ぶようになっていた。その方が金になったし、サレットを思いだすこともできたからであった。しかし相手はもう誰でもよかった。

（類似例三十六）

6　大井みどり

大井みどり（二十・尼ヶ崎）は資産家の愛くるしいひとり娘だったが、空襲で父親と邸宅・財産のすべてを失い、母親と二人でつつましく暮していた。食うに困るほどではなかったが、彼女はそんな生活がだんだんいやになり、金といい服といいたべものをもとめて、四六年の五月あるダンスホールに勤めた。毎日進駐軍や闇商人とおどっているうち、伊丹

基地からやってくる米空軍の下士官と愛しあうようになって、とうとうホールもやめ、基地のちかくに部屋を借りて同棲しはじめた。パンひときれが宝石のように尊かった時代に、彼女は情夫が運んでくる肉や卵をふんだんにたべ、国民服やモンペのほか何ももたぬひとびとのあいだを、新調の外套を着、ハイヒールをはいて、情夫と腕を組んであるいた。ある日きっとくる筈の時間に情夫が来ないので、基地に電話してみると、彼は今日アメリカへかえった、ということだった。彼女は電話器の前で卒倒した。

またホールで働こうとしたが、怠けぐせがついてしまって辛くて仕様がなかった。彼女はホールの仲間やボーイに、おどりにくるアメリカ兵で女をつれていないのがみつかったら、わたしの家へくるようにいってくれ、としつこく頼みこんだ。たまにはあぶれる日もあったが、たいていの晩は一夜かぎりの情夫が遊びにきた。そんな男たちと腕をくんであるく時も、前ほどではなかったが、彼女はやっぱりほかの日本人に優越を感じた。

(類似例二五)

7　丹野紀久子

衣料関係のN工場の女工員だった丹野紀久子（十七・仙台）は、街でみかける洋娼たちの華やかな姿に刺激されて、自分もどうかしてあんなふうになりたいと思った。金で体を売るのはよくないことにちがいないだろうが、あんなふうに親切にされたりいい服を着たりすることができれば、悪いと思う気持もいくらかまぎれるだろう。そう思い、また若いきれいな兵隊に抱かれるときのことを考えると彼女の胸はおどった。それに彼女のうちでは、もう彼女が体を売るよりほかに、母や弟たちを栄養失調から救いだす道は残されていなかった。

たまたま、前に工場で友達だったM子が、松島の進駐軍専用のダンスホールにいるという噂なので、彼女は松島へゆき、散々さがしまわったあげくやっとM子をつかまえた。事情をうちあけてたのむとM子はあっさりひきうけてくれた。「一時間たったらおいで。それまでに相手をさがしといてやるから。」一時間していってみると、大男の兵隊がM子と一緒に待っていて、俺はジェフだ、お前のような可愛いい娘を欲しかったんだ、といっていきなり彼女にキスした。M子はその通訳だけを済ませてさっさとかえってしまったので、彼女は急に心細くなった。しかし二人で歩いているうち、そこらへんはどこもかしこもみんな進駐軍と日本娘であふれていることがわかったので、だんだん自信がでてきた。草むらにもベンチにも宿屋にも海岸にも、露骨な風景が公然とくりひろげられていた。和服を着流したくろうと風の女が樹かげで嬌声をあげているかと思うと、唇を真紅に塗った子供のよう

な女学生がボートの上で兵隊の首にからみついていたりした。

そこを通りぬけ、人気のない森のなかへはいったとき、ジェフは彼女を押し倒して処女を奪った。予想に反して痛く、きたない感じだった。それでもM子に教えられたとおり指を四本だすと、彼は素直に四十円はらい、「マタネ」といってどこかへ消えてしまった。四六年春のことである。

その翌日から、彼女は毎日松島へかよった。もうM子に紹介されなくとも、濃い化粧をして派手なスカートさえはいていれば、相手はすぐにみつかった。彼女がもってかえる金で母親や弟たちの栄養失調もだんだんよくなってきた。母親は泣くだけで何も言わなかった。

（類似例二二）

8　桜井睦子

K学院の生徒だった桜井睦子（十七・札幌）は、四六年の六月、友達と四人で郊外の真駒内の方へハイキングにいった。芝生の上でバレーやダンスをして遊んだあと、くじびきに負けた彼女はひとりでかなり離れた農家まで水をもらいにいったが、運わるく、ジープをとめてそこらをあるきまわっている二人のアメリカ兵にみつかってしまった。

彼等は睦子に「ユウ、パンパン？」と話しかけてきて、彼女が「ノー！」と答えるのにもかまわず、無理やりジープにのせ、林のなかへ走り去った。悲鳴をきいた農家の子の報らせで友達がかけつけたときはすでにおそく、彼女は半裸のまま気を失って林の奥にころがり、スカートはひきさかれ、恥部から血が流れだしていた。

彼女はそれから学校を休んで、いったい自分はどうすればよいかを考えた。三人の友達は毎日慰めにきてくれたが、その慰めは感傷的なばかりで一向役に立たなかった。父は「ハイキングなぞにゆかないで家におとなしくしていればよかったのに」と嘆き、母は「お嫁にいかれなくなったらどうするんだい」とおろおろするのだった。彼女は聖書をよんだり、長い日記をつけたり、みんな忘れてしまおうと思ったりしていろいろ苦しんだが、最後にそんな消極的な方法ではとてもだめだということに気がついた。さいわい自分はあの兵隊たちの顔をおぼえている、キャンプへでかけていって司令官に逢いあの兵隊たちをさがしだして処罰してもらおう――彼女はそう決心した。しかし彼女がこの決心をお喋りの友達のひとりに何気なく打ちあけたことが、非常に悪い結果をひきおこしてしまった。

お喋りの友達はこのてんまつを学校の教師にさっそく報告し、驚いた教師は校長に報告し、校長は父兄会のボスと相談して「学校の恥を未然に防ぐために」警察へ連絡をとった。同時にひらかれた職員会議は「そんな問題をおこし、またそれをさらに大きくしようとし

ている生徒を、ほかの純潔な生徒たちと一緒にしておくわけにはいかない」という理由で彼女を退学させるにいたった。ふだんおとなしい生徒だったらかばってくれる教師もいたのかもしれないが、彼女は教師たちが戦争中の残酷な教育をけろりと忘れたような顔で民主々義だの何だのと論じている虚偽にたえきれず、いつもことごとに反抗的な態度をとっていたため、この退学決定はほとんど全教師の一致した意見によっておこなわれたものであった。「退学させちまえば、あとはあの子がどんなふざけた真似をしようと、学校に迷惑のかかる心配はないですからな。」彼女の担任である倫理の教師はそんなふうに言った。

明日キャンプへいこうときめた晩、彼女の家には大勢の警官がやってきた。「おい、ズベ公、お前進駐軍に訴えるとか何とかいって騒いでるそうだが、そんなことをすれば占領目的違反で暗いところへ入らなきゃならなくなるぞ。ほんとは今すぐひっくくっていけるんだが、それも可哀想だから、お前が進駐軍のことは今後いっさい申しませんと誓いをたてるなら許してやる、どうだ！」父と母は蒼くなって始末書を書き、やっとかんべんしてもらった。警官たちがぶつぶつ言いながらかえったあと、彼女は口惜し泣きに泣いた。

もっと悪いことには、この事件が当時駅頭などで売られていた悪質な赤新聞Ｉの探知するところとなり、「日米友好を乱すアプレ女学生――ＧＩとの痴情の果てが――学校当局も断乎たる態度」というセンセーショナルな見出しで一般のひとびとに報道されたことで

あった。このため彼女の一家は札幌にいられなくなり、夜逃げ同様に田舎へ移り、そのどさくさにまぎれて彼女は父母の前から姿をくらましてしまった。

彼女は持ち出した金で胸の出るブラウスと短いスカートを買い、髪を赤く染め、夜の盛り場をうろついた。「ハウマッチ？」と声をかけてアメリカ兵が寄ってきたとき、彼女はもう何年も前から洋娼だったような顔をして、「ヴェリ・チープよ」と答えた。最初の晩彼女は八人の兵隊を相手にしてめちゃくちゃに自分の体をいためつけた。ちょっと変っているというので彼女を買いにくる兵隊はだんだんふえていった。しつこくピストルを貸せといったり、とんでもないときに大声で泣きだしたりするから、少し気が変なんじゃないかと彼等は噂しあった。（類似例八）

第二章

街頭進出・全日本慰安所となる・女狩りグループ・解放をもとめて・スペシャルメイド・転落・自由な売春

RAAの解体と全慰安所のオフ・リミッツは、第一の結果として、慰安婦たちの街頭への進出という事態をひきおこした。彼女たちが自発的に進出していったというよりも、慰安所にいるかぎり売れない商品と化した彼女たちを、業者が街頭へたたきだしたのだといった方があたっているだろう。

たたきだされたこれら「特別挺身隊員」の数は、三万五千人から四万人ぐらいだったろう。これは慰安所閉鎖当時の慰安婦五万五千人のうち一万～一万五千人が更生したことを意味するものでなく、これら一万～一万五千人が洋娼から和娼（日本人相手の売春女性）にきりかえられたり、秘密営業あるいは合法的なキャバレーなどに集中していったことを意味するものである。和娼にきりかえられた女たちはもともと和娼だった者が多く、キャ

バレーなどで働くようになった女たちは戦争中の転業組が多かった。したがって慰安所から街頭に進出しなければならなかった者たちは、大半がもとの一般女性、つまり業者や警察にだまされたり、アメリカ兵や暴力団員に強姦されたりして慰安所へぶちこまれた女性たちだったということになる。

かつて空襲によって家と肉身を失った彼女たちは、いままたこの街頭への追放によってたべものと住む場所とを失ったが、彼女たちの肉体と同様、彼女たちの精神もまた、かつての清純な少女たちのそれではなかった。オフ・リミッツの立札を掲げた慰安所からでてゆくとき、彼女たちはさすがに解放の喜びを感じたが、それはいわば業者の搾取から解放されて自由に売春できる喜びであり、売春そのものから解放される喜びではなかった。

彼女たちは売春とは何なのかまだまるっきり知らなかったのだ。アメリカ兵に肉体を与えることは依然として「挺身」であり「全日本婦人を守るための犠牲」であった。アメリカ兵に強姦されて慰安所にぶちこまれ、そこで六ヵ月のあいだ「挺身」したことが、ほかの女性たちによって同情され感謝されなければならぬことであるとしたら、街頭で「挺身」することだってやっぱり同情され感謝されなければならない筈だ——彼女たちはそんなふうに考えた。

当時、日本円の価値がインフレでひどくさがっていたために、アメリカ兵が彼女たちの

肉体の代金を米国製のチョコレート・煙草・カンヅメ・化粧品・薬品などで支払ったことも、彼女たちのこうした考えかたを裏からささえた。金で買われているのでなく「贈物（プレゼント）」を受取るにすぎないのだから、私たちの行為はやっぱり「挺身」だ——。

しかし、だからといって彼女たちを責めるのは間違っている。たとえ彼女たちがこうした考えかたの間違いをさとってもういちど新しく歩き直そうと決心したとしても、歩き直すべき道はどこにもなかった。そのまま突きすすんでいくよりほかなかったのだ。彼女たちばかりではない、いっさいの道徳の基準が崩壊していたこの時代に、自己弁護を原動力としていくほか、どんな生きかたがありえただろう。

というわけで、彼女たちの街頭への進出は、公然と派手に誇らかにおこなわれた。アメリカ兵にぶらさがり、毒々しい口紅をぬたくり、髪と爪を赤く染めた彼女たちがみるみる氾濫しはじめるのを、疲れきった日本人はただ呆然とながめていた。そんな日本人は彼女たちの眼中になかった。日本人の男が言いよってきても彼女たちはふりむきもしなかった。「日本人は日本人どうし、貧乏な恋愛をし、貧乏な生活に甘んじるがいい。私たちは進駐軍としかつきあわない種類の女なのだ。私たちと日本人とは何の関係もない——」こんな意味の言葉を当時の洋娼たちの口からきいたひとは多いであろう。そしてこういう言葉を吐かせた彼女たちの精神をたち割ってみるとき、「挺身・犠牲」の意識がすでに彼女たちの身を守

る武器と化して日本人の方へむけられていたことを、彼女たちの犠牲者としての位置がいつのまにか征服者によって保護される者の位置にすりかえられつつあったことを、わたしたちは知ることができるのである。

だが、彼女たちが彼女たちと日本人とのちがいをいくら主張してみせたところで、その主張が通るのは日本人に対してだけであった。その区別はアメリカ兵にはわからなかった。彼女たちが慰安所にいたあいだだけは、アメリカ兵も一般の女性と彼女たちを区別するのに苦労しなかったのだが、彼女たちがいったん街頭にちらばってしまうと、アメリカ兵は日本の女性たちがみんなもと慰安婦だったような錯覚におちいった。しかしこれはアメリカ兵の責任だとばかりいいきれないところがある。「星条旗」紙のN記者によれば、「GIが彼の情婦とからみあっているのを見ると、日本ムスメの十五%は軽蔑を、十五%は反感を、さらに二十%は無関心を示した。しかしのこりの五十%は明らかに嫉妬や羨望や好奇心に燃えて、ふみにじりたいような感じをおこさせる黒い瞳を輝かせていた。」

だから、慰安所のオフ・リミッツがひきおこした第二の結果は、第一の結果である慰安婦たちの街頭進出よりもはるかに重大である。それはそれまで慰安所が存在することによってアメリカ兵と一般の日本女性とのあいだに立てられていた、目に見えない柵を破壊し、それまで慰安婦たちの上にのみ過重に集中されていた彼等の旺盛な性欲を、日本じゅうの

女性の上に拡散していったのだった。

それまではともかくもおとなしく檻のなかであてがわれた餌をしゃぶっていた猛獣が、もっと豊富な餌をもとめて檻のそとへとびだしたのも同じであった。オフ・リミッツ直前には全国で一日四十件ぐらいにまで減っていたアメリカ兵の婦女暴行事件が、オフ・リミッツ直後には一躍三百三十件にまではねあがったことも、このことをはっきり証明している。しかも、これは公式の数字で、このほかにどの位あったかはちょっと想像がつかないほどである。このうちMPに逮捕された者は一ヵ月でわずか十四人、処罰された者はたった四人であった。

反対に日本の女性たちの方は、アメリカ兵に性病をうつしたという理由でこの時期だけでも三十二人が逮捕され、監禁されたり軍事裁判にかけられたりしている。米軍の首脳者たちにとっては、たとえ日本じゅうの女性がことごとく強姦されようと、「そんなことは兵隊の性病罹病率がこれ以上増加するのにくらべたら全くとるに足らないこと」だと思われていたのである。この時期の強姦その他の暴行は、このように量的にもむしろ占領直後より、多く、質的にもいっそう残虐で非人道的なものであった。アメリカ兵たちは強姦の要領をすっかりおぼえこみ、万にひとつもしくじるようなことはなくなり、したがってそれは性欲の歪んだはけ口を求めるというよりも、ただ興味本位にムスメたちを傷つけてゆくという性格を濃厚に示してきた。

あながちムスメたちばかりでなく、日本人全部の精神がこの時期には拝米的事大主義の頂点に達していたことも、この傾向をさらに助長したであろうことは否定できない。二三の新聞の如きは、アメリカ兵たちが作った「女狩りグループ」のことを、「日米親善に一役買うボーイフレンド・ガールフレンドの会」という見出しで大々的に紹介したほどであった。「女狩りグループ」とは慰安所のオフ・リミッツ直後あたりから各キャンプで結成されはじめていた公然たる一種の秘密団体で、手段と場所とをえらばず、できるだけ多くの日本ムスメを傷ものにすることを目的とするスポーツ・チームのようなものであった。

この時期にキャンプに勤めた通訳たちなどの話によると、キャンプの士官クラブ・下士官クラブ・食堂等々の壁にアメリカ兵たちの名前をずらりと書きならべた紙が貼り出され、それらの名前の横の方には各自が傷ものにした日本ムスメの数がいくつもの唇のかたちで書きあらわされてあったそうだ。わたしがキャンプ・センダイで見たのはもっと手がこんでいて、そんな紙（これは唇のかたちでなくMVという符号であらわされていたが）のほかにもうひとつ、キャンプに勤めている日本ムスメの手札型の写真をずらりと鋲でとめて並べた壁があり、傷ものになったムスメの写真の上には赤インクで×印がつけられていた。わたしの記憶している限りでは、およそ百枚か二百枚あったであろうその写真のなかで、

まだ×がついていなかったのは比較的に新しく貼りだされたらしい下の方の写真たった十枚ほどにすぎなかった！　しかもその女狩りグループの名前は Charming members to Musumesan（ムスメサンにとって魅力的な連中）というのであった――。この連中はおよそ五百人、若い下士官はほとんど全部入会していた。

だから、この時期の暴行は、もちろん個人的な性質のものも少くなかっただろうけれど、主要なかたちとしてはこうして女狩りグループを中心におこなわれていた、ということがいえそうである。したがってそれはきわめて組織的・集団的な性質を強く持った暴行であった。組織的だったからこそ、占領直後のどちらかといえば個人的なかたちだった暴行に比べていっそう残虐的・非人道的なものになったのだ、ということもいえるかもしれない。ばらばらに分れて餌をあさっている猛獣たちも危険であるが、一団となって餌を追いもとめる猛獣たちはさらに危険である。もともと残虐な彼等は女狩りグループという集団のなかにはいることによって、群衆心理に駆られてさらに残虐化されたにちがいない。

もっとも、女狩りグループの全国的展開は、暴行の残虐化という結果とは別に暴行を技術的に洗練するという結果をも導きだした。つまり、壁の上の唇の数がふえてゆくにつれて、ただ強姦するだけでは面白くない、ムスメを誘惑してしかるのちに強姦した方が――ムスメを夢中にならせてからもっとスムースなかたちで強姦した方が、いっそう興味本位

の女狩りらしくていいじゃないか、というような傾向が生れてくるにいたったのである。（キャンプ・センダイの女狩りグループに「ムスメにとって魅力的」という肩書がついていたのも、実はこの意味からであった。）それもやっぱり強姦にはちがいないのだが、ただ目的をとげるまでの手順がやや複雑で巧妙なものに変化していったわけである。看護婦の寄宿舎にトラックで乗りつけて荒しまわるのも強姦なら、甘言で誘惑したあげく一週間やそこらスペシャル・メイドに囲っておいてあっさり捨ててしまうのもやはり強姦の一種であるとわたしは言いたい。

少くともアメリカ兵の方ではこの二つの行為のあいだに本質的な差異を認めなかった。我儘な飼主が気が向けば犬を可愛いがり、気が変るとたちまち棒でなぐりつけたりするのとよく似ている。たとえ差違があるにしたところで、それは前者がより肉体的な暴行であるに反して後者がより精神的な暴行であり、また前者が強姦であるのを疑うムスメはいなかったけれど、後者が恋愛であることを信じたムスメはたくさんいた、というぐらいなものだったろう。

女狩りのこの二つの面を、アメリカ兵たちは目的の緩急にしたがって自由に使いわけた。気がむけば、草原で、公園で、キャンプで、空家で、自動車のなかで、物も言わずに拳銃をつきつけてムスメたちの肉体を奪い、また気が変れば街角で、ダンスホールで、公園で、

映画館で、家庭で、教会で、キャンプのなかで、急速にムスメたちと接近し、ガムやチョコレートを投げ与え、彼女たちの心をひきつけて、その肉体のみならず時にはその愛をも奪ったすえ捨て去るのだった。この時期に日本に進駐していたというアメリカ兵にムスメたちについての感想をきいてごらんなさい、彼等は異口同音にこう答えるだろう——日本の女ほどかんたんに手にはいる女はいないね——と。

しかし、このような誘惑によって彼等の手に落ちたムスメたちの全部が、意識的に肉体を売ろうと考えて彼等の要求に応じたのだといったら、それは彼女たちを侮辱することになるだろう。売春を望んだムスメなんかひとりもいやしなかった。彼女たちはただ暗いみじめな敗戦の現実から解放されたいとねがっただけなのだ。彼女たちの意識の底には、戦争は男が勝手にはじめて勝手に負けたのだから、自分たちまでがその責任を分担するのは真平だという、たいへんもっともな気持が作用していたのかもしれない。それに、くたびれた復員服の日本の男たちにくらべて、街にでてきたアメリカ兵は何と金持で、何と明るくて、何とハンサムだったことだろう！　ながいあいだあらゆる面で抑圧されてきた彼女たちが、彼等に愛される以外に幸福になる道はないとひとりぎめしたとしても、それはまったく無理のない話であった。

そして、幸福を望むムスメたちのなかから、スペシャル・メイドになる者がふえてきた。

その数は四五年の十一月には全国で三千人足らずだったのに、四六年の六月には早くも一万九千人以上に達している。その五十二%がもとキャンプに勤めていた女性、十七%がダンスホール、キャバレーなどに勤めていた女性、あとの三十一%が街や家庭や教会で相手と知りあった女性であった。士官と上級の下士官だけがスペシャル・メイドを囲う資格をもっていた。彼等はキャンプやホールや街で気にいったムスメをみつけると、営外居住が許可になりさえすれば、その日からでも同棲生活にはいることができた。また必ずしも営外居住でなくても、第一章—3の例のようにキャンプ全体が巨大な同棲地帯を形成していた場合もあった。前の場合、同棲のための住宅はどの日本人の家でも電話一本で接収できたから、面倒なことは何もなかった。接収命令に応じない日本人は占領目的阻害者とみなされて軍裁に送られていったのだ。

なかには、こうしたスペシャル・メイドの経路をふんで、相手の士官・下士官と正式に結婚できたムスメもなかったわけではない。しかしその数は全体の五%にもみたない九千人足らずにすぎなかった。（しかもこれはあとの話であるが、この九千人のうち渡米後も何とか結婚生活をつづけているといえるのはたった七百人ほどで、のこりは全部離婚され、中国人街や黒人街の娼婦に落ちているという。——米移民局の非公式調査による。）あとの九十五%以上は、男に飽きられたり、新しい女が現れたり、男が帰米したりするのとともに、

続々と捨て去られていった。四六年七月から在日米軍は大量に帰国しはじめたので、捨てられるスペシャル・メイドの数も激増した。妊娠したまま捨てられた者の率がとくに多かった（七月には約二千五百人のうち六十％）のも注目すべきことであろう。

捨てられたスペシャル・メイドは、ふたたびスペシャル・メイドになろうとして焦った。しかし米軍の数はさらに減少をつづけたので、その希望をとげることができた者はほとんどなかった。焦るままに自分をスペシャル・メイドにしてくれそうな士官・下士官たちと無差別な情交をこころみているうち、いつかそれが習慣となって士官・下士官・兵隊を問わずアメリカ兵となら誰とでも関係するようになっていく。捨てられたとき、たいした金を持っているわけでもないので、誰でも関係した相手から金をとるようになる。こうして彼女たちは職業的な娼婦に転落していった。

だから、この時期の洋娼の源泉には、もと慰安婦群の街頭進出と、スペシャル・メイドを核とするムスメ群の転落との、二つの大きな流れがあったわけである。オフ・リミッツ直後三万五千～四万人だった洋娼数は、スペシャル・メイドからの初期転落者を加えてすぐ四万五千人にまで上昇し、四七年一月にはおよそ六万人余、同五月にはついに七万人を突破した。彼女たちを買うべき米軍がどんどん減っていったにも拘らず、彼女たちの数が

活発にふえつづけたのは、スペシャル・メイドからの転落者がその後も連続的に加わったためである。

もと慰安婦組と、もとスペシャル・メイド組はたがいに水と油の関係にあったといえるだろう。前者のモラルは「挺身・犠牲」、後者のそれは「解放」。性質のまったく違う両者が同じ商売をやっていて争いもおきなかったのは、この時期の洋娼がてんでんばらばらで集団化していなかったことによるものだった。この時期の売春は完全に自由な個人的な形態でおこなわれていたために、彼女たちひとりひとりはどのグループにも属さず、したがって強制されたり搾取されたりすることもなかった。強制され搾取される街頭集団を作っていなければ街娼ではないというのなら、この時期の洋娼の形態は不完全街娼形態とでもよぶより仕様があるまい。この形態は四八年のなかば頃までつづき、それから次第に街娼のかたちに移行していく。